

賢治童話の原点「愛」について

石 井 茂

宮沢賢治（明29～昭8）の人生は、歌・詩・童話などのユニークな創作活動、法華経篤信とその布教活動、水稻栽培の技術指導、農村生活の改良をめざした芸術化運動など、まことに多彩多忙であった。そして、その性格人からは、素朴純真、仁慈寛厚、篤実温順：

あたかも賢人聖者のごとく神格化した評価が多くなされてきた。しかし一面には、「人間賢治」という見方もあり、「賢治といえれば温順仁慈に結びつける。しかしそれはあやまりだ。賢治はそんなじつとがまんの子ではなく、そのみずからにみごとくに名づけたごとく、まさしく修羅の怒りをいのちとする……」と青江舜二郎氏の評するような見方である。詩「春と修羅」にも、

四月の気層のひかりの底を

嘆きしはぎしりゆききする

おれはひとりの修羅なのだ。

と自評するように、激情的で、感情の赴くままに猪突する情念型の性格でもあった。本稿はそうした「人間賢治」における「愛」がどのようなものであったか、肉親愛、農民愛、生物愛、宗教愛、異性

愛などについて、童話とも関連づけながら概観してみようと思う。

肉親愛―わけても父と妹を中心に―

父政次郎（明7～昭32）は、勤勉誠実な人物で、よく家業（質・古着商）をおさめ、地方自治（町議ほか各種委員）にも参与し、その功績により昭和二十六年に藍綬褒賞を受賞する。また浄土真宗の篤信者でもあり、家人への愛も深く、わけても賢治への愛はきわめてこまやかなものであった。しかし、家業・宗教上の対立は激しいものがあつた。賢治もこの愛には終生感謝し報恩の念を忘れなかつた。特に、六歳の赤痢、中学卒業年の擬似チフス、高農時代の肋膜炎、羅須地人協会時代の肺浸潤、東北砕石工場時代の結核と、賢治は短い生涯に数々の大病をする。そのつど父親が心配し看病に専念するさまは異常なほどであつた。⁽⁴⁾昭和六年九月、在京中に発病し死を覚悟して遺書を書くが、両親あてには、

この一生の間どこのどんな子供も受けないやうな厚い御恩をいただきながら、いつも我慢でお心に背き、たうとうこんなことになりました。今生で万分の一もつひにお返しできませんでした御恩

は、きつと次の生又その次の生で報じたいと、それのみを念願いたしました。どうか信仰といふものでなくとも、お題目で私をお呼びください。そのお題目で絶えずおわび申し上げお答へします。と、父母の深い慈愛を謝し、念願である日蓮宗への改宗を促している。人間として肉親としての相互の愛はまことに深切なものがあつた。ちなみに父は、賢治の死後の昭和二十六年に日蓮宗に改宗し、家業はそれよりずっと早い大正十五年ごろ、弟清六が金物屋に転ずるのを許可している。

二歳年下の妹トシ(明31→大11)は、賢治のもっとも深い理解者であり、協力者であり、信仰を共にする同信者でもあつた。大正四年賢治が高農に、トシは日本女子大学家政科に入学するが、その頃の兄妹間には文通がしきりで、かなり内密のことも腹藏なく披瀝し合っている。また、トシがチフスの疑いで、大正七年十二月二十六日東大小石川分院(別名永楽病院)に入院するや、翌日母と共に上京し近くに下宿し、翌年二月六日退院するまでの三十余日間、毎日その病状を父に報告しその書簡数は四十通に上る。いかに父の心中を察するに深く、妹を愛する心が深かつたか。また一面賢治は、看病のかたわらひそかに東京で鉱石関係の職を開業すべく準備し、その許可も同時に手紙で訴えている。そして大正十年一月二十三日国柱会を頼つて無断家出し、その滞京中、「トシビョウキスグカエレ」の電報に接し、書き始めた童話を大トランクに詰めて急ぎよ帰郷し、陰に陽にその看病に尽くし、翌十一年十一月二十七日、トシは二十四歳の若さで他界する。その臨終における兄妹の思い合ひい

たわり合ひは、妹の死の直後に詠んだ「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」の三編の詩に、いまわのきわに残したトシの言葉をちりばめて、美しく清らかに、そして悲しくうたい上げてゐる。草野心平は、肉親の死を悼んだ詩として、これほど美しいものは私は知らないと思賞している。また翌年八月北方の旅を材として詠んだ「青森挽歌」「津軽挽歌」「オーソック挽歌」「噴火湾」など二連の詩編も、險に焼きついた妹の死のシーンをなまなましく再現し、今もつてその死が現実とは思われず、どこかに隠されたとし子をおもふ(噴火湾)と悲しむ。死が二人の仲をますます清め深め、そしてそれが童話に転生し投影する。「銀河鉄道の夜」「グスコープドリの伝記」「やまなし」「シグナルとジグナレス」「ひかりの素足」など数多くある。

ついで姪への愛について一言。昭和六年ごろ重い病床で、妹クニの娘で三歳のフジ子が、咳をしながらむすかり泣くの心に心を痛めて、「いかなる前世の非にもあれ、ただかの病かの痛苦をば、私にうつし賜はらんことを」と仏に祈る詩を、手帖九ページにわたり綿々切々と詠んでいる。また、同手帖に「法を先とし、父母を次とし、近縁を三とし、農村を最後の目標として只猛進せよ」とメモしている。生涯の目標の順序だてである。法華経に次ぐものとして父母近親への愛が位置づけられてあつたのである。

宗教愛―ただひたすらに法華を信じ求めて―

賢治が法華経と出会ふのは、中学四年のころ島地大等の法話を聞いて感にうたれ、ついでその編著「漢和対照妙法蓮華経」を熟読する

ころに始まる。そしていよいよ深め究めて昭和八年九月二十一日、死に臨み「国訳妙法蓮華経」一千部を知人友人に配布してほしい旨を父に遺言することに終わる。その間、父には改宗を不断に訴え、友人保坂嘉内らには入信を執拗にすすめ、題目を唱えて町中を歩きまわる寒修行をし、国柱会入会のために無断家出し、宗教色の濃い童話の創作に専念するなど、数々の活動がある。かほどまでに賢治を法華に駆り立てたものは何か、その原因について考えてみよう。

基盤的には、幼少のころから熱心な仏教信者の家に生まれ育ち、仏教的感化や影響を受けていたこと、生命あるものに深い憐びん(11)の情を持つ性格を有していたこと、現実界のかなたに四次元の世界を感覚し、そこに全生命体を支配する「宇宙意志」(12)を感得する異次元感覚の所有者であったことなどがあげられよう。そしてさらに法華経なるものが、精神面では現実の絶対的肯定に発し無限抱擁の愛を重んじ、表現面では詩句・比喩・象徴などを豊かにとり入れれ文学色の濃いものであつて、賢治の体質に精神・表現ともどもなじみ深かつたことなどである。わけでも賢治の尊敬した田中智学の「本化妙宗式目講義録」では、劇や歌、漢詩・美術・音楽などを宗教活動の中にとり入れている点に賢治は異常な魅力を感じたらしい。その活動が童話創作や羅須地人協会の設立につらなる。この後者は武者小路の「新しき村」の刺激によるよりは、田中の「本時郷団」(別名法華村)の構想に基づくものと森山一氏(14)は説く。そしてこの法華経は、賢治のみを魅了するばかりでなく、「法華経はまさに日本人のための経

典だと言つてさしつかえない」と、仏教学者紀野一義氏(15)は明言し、さらに紀野氏は賢治を評して、「(法華経が)日本で花咲いたのは、法華経の宇宙的な世界を南無妙法蓮華経の七字に結晶し曼荼羅として開眼した日蓮の法門と、華麗壮大な童話や詩に結晶した宮沢賢治の文学」の二つであると賞賛している。

かの有名な「雨ニモ負ケズ」の詩はいろいろに評価(16)されているが、自己を謙抑し他の評価を意に介せず、不幸困窮する人々に心から同情し、救済の手をさしのべていきたいという、一見平凡ながら、自己犠牲の心の姿勢、菩薩位の心境を吐露したもので、かような色あいは童話にも、濃淡の差こそあれ数多く投影されている。最も典型的な「ひかりの素足」をはじめとして、「グスコブドロの伝記」「銀河鉄道の夜」「よだかの星」「からすの北斗七星」「山男の四月」「虔十公園林」「なめとこ山の熊」「ヒヂテリアン大祭」「氷河ねずみの毛皮」「十力の金剛石」などなど。

さらに宗教愛は、仏に対する愛から仏の立場からの愛に転じ、そして人間愛・人類愛ともなる。「世界全体が平和にならないうちは一人の幸福はありえない」「われらは世界のまことの幸福を求めよう、求道すでに道である」というスローガンを旗印とする「農民芸術概論綱要」の精神がそれである。暗く貧しい農村に芸術を導入して明るく楽しくしようと試みた。

農民愛―不幸な農民への理解同情から救済へ―

賢治は花巻の裕富な商家の出であるが、東北の厳しい自然状況下に悲喜浮沈する農民には、既に幼少の頃から関心を寄せ、小学六年時

の作文に「農家の秋」⁽¹⁷⁾と題し、実りの秋を迎えて喜びはたらく農民に対する深い共感を述べている。そして、大正四年四月、盛岡高農農学科第二部(農芸化学)に入学し、地質や肥料や栽培の研究に携わる時点から、かれの人生は農とは不離一体のものとなる。卒業後、稗貫農学校の教師、依頼されての岩手国民高等学校講師⁽¹⁸⁾(農民芸術論担当)、自力による開墾と耕作のかたわら羅須地人協会を運営し無料奉仕の肥料相談所を開き、東北砕石工場における肥料用炭酸石灰の開発や販売などの分野で活動するが、一つとして農と無縁なものはない。そこに農民と共に豊作を喜び、凶作には悲しみを分かちあうという緊密な一体感が生じ、科学の力と自己犠牲をも辞さない人力を尽くし、信仰の力で農民の心に安らぎを、音楽や劇によって生活にうるおいを、とめざす実践活動は、そのまま文筆活動にも投影する。「グスコブドリの伝記」「オッペルと象」「カイロ团长」「セロ弾きのゴッシュ」など数多くある。また一面に、弱い農民を虐げる悪徳商人や高慢な権力者や、頽廃した都会文明やそれに對する反感や皮肉・諷刺を含むものも多い。「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」「鳥箱先生とフウねずみ」「クねずみ」「なめとこ山の熊」「税務署長の冒険」「二人の役人」「猫の事務所」「注文の多い料理店」など。そして臨終に近い時点で詠んだ歌二首、
方十里稗貫のみかも稲熟れてみまつり三日空はれわたる
いたつきのゆ糸にもくちん命なりみのりに棄てばうれしからまし
この昭和八年という年は、岩手県未曾有の豊作で、九月二十日ごろは田圃には黄金の波が立ち、おりから鳥谷ヶ崎神社の祭礼にあたり、

その包みきれない喜びや感謝や満足、死の悲しみ淋しさを越えてうたったものである。前者はその晴ればれとした気分を、後者には志なからばで倒れゆく身を残念に思いながらも、わが身がみほとけのため稲の実のりのためとなったと思えばうれしいう、暗い悲しみの中での自得の心を、みごとにうたい上げ、愛農一筋に生きた賢治の総結集を見る思いがする。

さて、かくまで賢治をして農に駆り立てたものは何か、専攻し専門とする農業研究とその普及に殉じたといえればそれまでであるが、その根底にいくつか考えられる理由の、もつとも大きなものとして私は次の二つを考えたい。一つはすべての人の幸福と平和を念願とする仏教の精神や理想の実現をめざしたこと、それは同時に四次元感覚をもって受けとめた宇宙意志でもあり、その意志の実現をめざしたことである。第二は注②に示す宮沢家の「社会的被告」の償いを、自分でできる農の力を通じて農民に還元しようという心境からではなかったかと推察する。稲作指導の結果、天候不順に因る凶作の償いをも、自己の責任として払おうという詩⁽²⁰⁾などから、そのように考えてもよからうと思う。農事に心を砕き痛め、一喜一憂するさまや、同時に農村の旧習や農民のエゴやずるさをも不快とする詩は「春と修羅」(第三集)に多く見られる。それから察するに、賢治の生前は農民に感謝されること少なく、むしろ冷やかしや嘲笑の方が多かったと思われる。その中でひたすら農民愛をもやし続け、命をちぢめるような苛酷な努力を重ねたのである。宗教的運観なくしては耐えられないところである。

動植物愛―すべての生物を兄弟と思ひ―

賢治の動物愛の逸話は実に多い。そしてある時期には菜食主義に徹した生活をもする。その菜食主義をテーマとした童話に「ヒヂテリアン大祭⁽²⁾」というのがある。その中で賢治の支持する「同情派」(ほかに「予防派」)の説明として、

あらゆる動物はみな生命を惜むこと、我々と少しも変りはない。それを一人が生きるために、ほかの動物の命を奪つて食べる、それも一日に一つどころではなく、百や千のこともある。これを何とも思はないのであるのは、全く我々の考へが足りないので、よくよく食べられる方になって考へて見ると、とてもかあいさうで、そんなことはできない。

とある。これが賢治の動物愛の本質である。動物といえども生命を惜しむ生き物である。食べるときたべられる動物の立場に立つて考へよというのである。さらに、この菜食主義の実行面に立てば、次の三派があると説く。第一は全く動物質のものを食べない、第二はチーズやバターのような、動物の命を奪うことのない動物質なら食べてもよい、第三は賢治の支持する立場で、「たぐさんの命のためはどうしても一つの命が入用な時は、仕方がないから泣きながら食べていい」というのである。賢治は人間の食物に動物質・植物質・鉱物質とあつて、その動物質を除外したら、全地球上の半数の人類は餓死するだろう、植物質オンリー主義の立場を主張しても、植物につく虫(害虫)を殺しているのではないが、などと主張して人類生存という「大」を生かすためには動物という「小」を犠牲にするの

はしかたがないとは認する。その際動物にあわれみと感謝の念を忘れてはならないと。そしてさらに、沢山の命の為に自分の命が必要なら、投げ出すにやぶさかでない、自己犠牲を説き、端的には「なるべく植物をとり、動物を殺さないようにしなければならぬ」と結ぶ。前二派にくらべ、現実的・実態的・科学的で幅とゆとりのある菜食主義と評せよう。

この考へは賢治の童話の中では、弱肉強食というパターンをとつて数多く描かれている。それを賢治は好ましくはないが生命体保存上の止むをえない構造として実態として容認しているのである。例えば、「やまなし」ではクラムボンが魚に食われ、その魚がかわせみに食われ、「よだかの星」ではかぶと虫や羽虫がよだかに食われ、それがさらにたかに食われようと、「銀河鉄道の夜」では生物がさらに食われ、それがさらにいたちに食われ、「くもとなめくじと狸」ではかたつむりがなめくじに食われ、それがさらに蛙に食われ、「なめとこ山の熊」では熊が小十郎に、小十郎が悪徳商人にくわれるというように。それは止むをえざる生存の実態であるが、できることならそれを最小限にくい止めるか、皆無にしたいというのが賢治の念願であつたことは前述のとおりである。「よだかの星」で、よだかが弟のかわせみに「どうしてもとらなければならぬ時のほかは、いたすらに魚をとったりしないように」と告げることばや、「からすの北斗七星」の中で、「敵を殺さないでいいやうに早くこの世界がなりますやうに、そのためならば私のからだなどは何べん引き裂かれてもかまひません」と星に祈る言葉などがそれぞれである。

それが賢治のいう「まことの平和」である。

次に、かくまで徹治が動物を慈愛する根拠は何か。前記「ヒチテリアン大祭」の中で、菜食主義をめぐって、各国各界各派の代表が論議する中で賢治は、「すべての生物は無量の劫の昔から流転に流転を重ねて来た」ため、かつて友人や兄弟親子であったもの間に、離れや隔てを生じて、見知らぬ関係になったが、元をたせば「我々のまはりの生物はみな永い間の親子兄弟である」と説いている。また、大正十二年ごろ匿名で家々に配った宗教的啓蒙を意図した手紙の中でも、「あらゆるけものも、あらゆる虫も、みんなみんなむかしからのお互ひのきやうだいなのだから」、「すべての生き物のほんたうの幸福をさがさなければいけない」とある。つまりは、人間も動物も元をたどれば同種同類のものであるというのである。したがって賢治の描くすべての動物は、動物としての生態的特徴を十分に生かしながらも人間に近似し、人間に親近し、人間と自在に交流交感する存在として登場している。たとえば「やまなし」における蟹の親子・兄弟の会話や動態は、蟹の記録映画のスクリーン画面を見ようような実在感を感じさせると共に、「人間の親子・兄弟間のはほえまじい関係描写としても受けとられる。「なめとこ山の熊」は、人間と熊との死闘対決という凄惨な物語であるが、細部の個々の描写では、小十郎に鉄砲を向けられると「大ていの熊は迷惑さうに手を振って、そんなことをされるのを断った」というように、ユモアで親しみにあふれた描写をする。賢治の動物愛に基づく自然なボイズがそこに見られるといえよう。

さらにそうした動物愛は植物にも及ぶ。再度の引用であるが、「ヒチテリアン大祭」の中で、動物と植物とは区別しがたく、根源に遡れば「バクテリアや植物だ、アミーバーを動物だ」という、研究の便宜上、勝手に区別しているだけで、本来的には区別がないと説く。「一九二九年二月」と題する詩に、

われやがて死なん／今日または明日
新しくまたわれとは何かと考へる

われとは畢竟法則の外の何でもない
からだは骨や血や肉や／それらは結局さま

さまの分子で／幾十種かの原子の結合

原子は結局真空の一体／外界もまた然り
……………

と、自然科学者らしい分析論の立場から、人間も外界のもろもろと一体の関係にあると。さらにこの詩は続いて、そのもろもろの分子原子を統合し支配する法則があり、その「法の名を妙法蓮華経と名づける」と説く。つまり、法華経は宇宙の万有の根本、全体を支配する大経典で、人間も動物も植物もすべてその意思と恩恵によって存在するというのである。

そうした考えから賢治の描く植物は、これまた人間や動物に近似し、人間と自在に交流し交感する有機生命体として存在する。「鹿踊りのはじまり」の中で、環になって踊る六匹の鹿のそばの一本の樹木を、「太陽がちゃうど一本のはんの木の頂にかかってあましたのど、その梢はあやしく青くひかり、まるで鹿の群を見おろしてぢっ

と立つてゐる青いいきもの」と描写し、「種山が原」で、夢からさめた達二を、「一本のつりがね草が身体を屈めて達二をいたはりました」ととらえ、「タネリはたしかにいちにちも噛んでゐたやうだ」の中で、タネリが西風のゴスケといっしょに、柏の木に向かつて、「まだ睡つてるのか、柏の木、遊びに来たから起きてくれ」と呼びかけたりするのがその例である。さらに最後の例に見られるように、風も、(雨も雪も石も水も星も…)それら自然物や自然現象までも同様な扱いを受けている。殊に風は賢治童話では主要な素材であり、「風の又三郎」では、「又三郎―風―村童」の三者の結びつきにおいて神秘幻想の世界が構築され展開し、風が聴覚・視覚・触覚の各器官を通じて生物的にとらえられている。

賢治の童話論として唯一著名な、童話集「注文の多い料理店」の序の中で、

これらわたくしのお話は、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。ほんたうにかしは林の青い夕方を、ひとりでも通りかかったり、十一月の山の風の中にあるえながら立ったりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかなないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書いたままです。

とあるのは、まことに賢治の実体験に基づくところと思われる。私もかつてこの童話論と童話との関連を確認しようとして、ただ一人北上川の岸をめぐるつたり、なめとこ山や早池峰山や種山が原に登山

逍遙したりしたが、なるほど自然が生命あるものとして呼びかけてくるように幻覚され、賢治を幻想作家というよりは写実作家として見なおすべきではなからうかという感じを抱いた。

異性愛―特に三人の女性との関係について―

賢治の三十七年の生涯は独身で終るが、賢治は決してストイックな女性嫌忌者ではなく、むしろ性的関心も性欲的感受性も、普通なみかそれ以上であったというのが通説である。前述のように広汎かつ深切に愛を感ずる人であり、しかも素朴純粹でひたむきに深究する激情的な人からであるので、恋や愛や性のほむらは、飄々孤とした外貌とはうらはらに、激しいものがあつたと思われる。賢治の好んだイギリス海岸を題材とした作品に、詩に「イギリス海岸の歌」(24)「川しろじろとまじはりて」「泥岩遠き」の三編、童話に「イギリス海岸」などがある。その「泥岩遠き」の詩の一節に、

風蒼茫と／草緑を吹き／あてなく投ぐるわが眼路に／きみ待つこと
とのむなしきを知りて／なほわが瞳のうち惑ふ

とある。この所は猿ヶ石川が北上川に合流するすこし下流の西岸で、青白い第三紀層の泥岩が河底に露出し、あたかもイギリスのドーバーの岸に似ているところから賢治が命名したものである。この詩句には恋による憂愁苦悶の情が濃い。他の二編も同様に暗愁を帯びている。おそらくはこの岸辺には賢治にとって秘めた忍恋・悲恋の体験でもあつたのであろう。また賢治のごく初期の散文小品「旅人のはなしから」(25)の中に「この多感な旅人は旅の間に沢山の恋をいたしました。女をも男をも、ある時は木を恋したり…」とある。

「木を恋した」は明らかに賢治の領域であるので、「多感な旅人」
「沢山の恋」も賢治のその体験をさすことにならう。有形無形の恋
体験があつたのであろう。こうした方面では、賢治と親近関係にあ
つた森莊己知⁽²⁶⁾ 関登久也⁽²⁷⁾、儀府誠一⁽²⁸⁾の各氏の証言や著述がある。以
下に述べることもこれら諸氏の所説に負うところが大きい。

第一の女性は岩手病院看護婦高橋ミネ。賢治と同年、紫波郡日詰
の出身、のち北海道夕張の伊藤某と結婚し昭和四十六年に没した。
賢治は大正三年三月盛岡中学を卒業するが、家業を継がせる意思の
父の反対で進学を断念し悶々の日々を送る。そして平素悩まされて
いた鼻の手術をするため岩手病院に入院、その後発疹チフスの疑い
で四、五の二月間入院する。その間、賢治は高橋に恋をする。それ
に関する短歌や詩には次のようなものがある。

①すこやかにうるはしき人よ病みはててわが目黄色に狐ならずや

(歌稿A 112 歌稿B 112)

②またひとり林に来て鳩のなきまねしかなしき小さき百合の根を掘
る (A 161 # B 146)

③桑つみて君を思へばエナメル⁽²⁹⁾の雲はてしなく北に流るる

(# A なし # B 129)

④君がかた見んとて立ちぬこの高地雲の立ちまひ雨とならしを

(# A 175 # B 157)

⑤志和の城の妻熟すらしその黄色君ゐる空のこなた明し

(# A なし # B 179)

①は明らかに入院中の作。相手を「すこやかにうるはしき人」と評

し、病みつかれた自分を醜い狐と評す。謙抑ではにかみやでうぶな
若者像が感じられる。Aで「人↓友」と改めたのは妹への憐りから
かも知れない。②の歌は後年に文語詩「百合」の母胎となる。その
詩とは、

百合掘ると／唐鞆⁽³⁰⁾をかたぎつ／ひと恋ひて林に行けば／濁り田
に白き日輪／くるはしくうつりゆれたる

友らみな大都の中に／入学の試験するらん／われはしも身はう
ち病みて／心はも恋に疲れぬ

このまひる鳩のまねして／松森のうす日の中に／いとちさき百
合のうろこを／索めたるわれぞさびしき

右の詩では、この時の虚無・敗北・孤独な心境の中に「恋に疲れぬ」と
いう激しく燃えてむなしく終わる倦怠を感じさせている。③の歌は
母の養蚕の手伝いで桑摘みに出て、恋する人の住む北の盛岡の空を
望見したもので、声調もよく自然と心情がよくマッチしている。歌
稿Aには見えないが同類に「雨にぬれ屋根に立ちたりエナメルの
雲はてしなく北に流るる」とある。④も3と同じようにはるかな思
いを雲に託している。「雲の立ちまひ雨とならしを」には望みのかな
わぬ失望と、暗く沈んだ心情とが感じられて効果ある表現。類歌に
「思はずもたどり来しかこの線路高地に立てど目はなぐさまず」(A
・B共に174)。⑤は相手の出身地近くの紫波郡志和の地にある城址
(坂上田村麿築城という)のあたりの空を望見しての詠、こなたの
空の明るさから君住むあたり古城址のほとりは妻は黄金色に波うっ
ていることだろうと想像している。なお、この歌(など)をふまえ

た文語詩に「丘」がある。

森の上のこの神楽殿／いそがしく登りて立てば／かくこうはめぐりてどよみ／松の風頬を吹くなり

野をはるかに北を望めば／紫波の城の三本の杉／かがやきて黄ばめるものは／そが上に麦熟すらし

さらにまた夏雲の下／青々と山なみはせ従ひて野は激めども／かの町はつひに見えざり

うららかに野を過ぎり行く／かの雲の影ともなりて／君がべにありなんものを

さもわれのがれてあれば／うすくらき古着の店に／ひとりあて祖父や怒らん／いざ走せてこととふべきに

うちどよみまた鳥啼けば／いよいよに君ぞ恋しき／野はさらに雲の影して／松の風日に鳴るものを

この詩から、古着商店の店番を逃げて、小高い鳥谷が崎神社あたりの神楽殿から、恋人の生地紫波郡志和の方を恋しく懐しくながめている賢治の姿が浮かぶ。清純哀婉、純情な若者らしい詩情がある。

十八歳の時の体験を十六年後（昭和四年ごろの作詩とみる）に思い浮かべての詠とは思われないほどみずみずしい。枯れることのない情感の所有者であったと思われる。なお、この詩に異稿があり、第四連「うららかに……ありなんものを」の箇所だけが次のようになり、他はだいたい同形。

来し方は夢より淡く／行く末は影より遠しけふもまた病む人を守り／つつがなく君やあるらん

この方が看護婦としてのイメージが鮮明で慕情も深い。また、注4の「祠の木に青き花咲き」の詩もこの恋を詠んだもので、その中に「君とわれと年も同じ」「父母も許さぬ」「火の如く君を思へどもわが父にそむきかねたり」などの詩句があり、単なる恋ではなく結婚を一途に父母に迫ったのかと思われる。多感な青年の純情に燃えた恋として、不発に終わっただけに傷心のきずあとと深く永く残ったようである。初恋といえるものであろう。

次は自炊独居の頃出現した積極的な女性高瀬つゆ。大正十五年三月農学校を退職し、下根子桜の別宅で独居自炊し、開墾と耕作に従事し、かたわら羅須地人協会の行事も多忙のころ、常時訪れては炊事・洗濯・掃除などに好意的・献身的に奉仕する女性があった。そのうち、その女性が結婚を望むような態度に変わってきた。賢治にはその気がなかったので避けるようにし、果ては拒絶してしまう。女性は一転して逆恨みしかなり激しく賢治に報復的な態度をとったらしいことは次の詩からも察せられよう。

聖女のさまして近づけるもの／たくらみすべてならずとて／いまわが像に釘うつとも乞ひて弟子の礼とれる／いま名の故に足をもて／われに土をば送るとも／わがとりこしは／ただひとすじの道なれや

これは「雨ニモ負ケズ手帖」に書きとめられていたものである。賢治は死期に近いころまでこの一件が忘れられず、許せないという心情で受け止めていたことがわかる。初めは聖女ボーズで近づき、結婚の「たくらみ」が不成功に終るや、賢治の人形像に釘をうって呪

ったり、あと足で土をはね返してくるような非礼を浴びせ、数々の報復をしてきても、私は終始一貫、同じ態度で接してきたので、非は先方にあつてもこちらにはない、と強弁している。昭和七年六月二十二日中館武左衛門宛書簡に、
尚御心配の何か小生身辺の事別に心当りも無之、若しや旧名高瀬女史の件なれば、神明照覧、私の方は終始普通のし方の客として遇したるのみに有之

とあり、女側が賢治の悪口を言いふらしているのを、友人と思われる中館が聞いて、心配して寄せた手紙への返事であろう。前記の詩同様、神明照覧の下でも自分の態度に裏切りや変節のないことを強調している。この「高瀬」というのは結婚前の姓で、名は「露」、別宅に近い向小路あたりに住み小学校女教師であり、クリスチャンで気は強く情熱的な性格であつたらしい。生年は明治三十四年、没年は昭和四十五年、平穩幸福な生涯を終つたという。女側の資料がなく真相は不明であるが、女性づきあいにうとく、社交性にも乏しい賢治のことであるから、女側に、気があるような誤解を持たせる態度行動でもあつたことかと思う。事実それに類する行為の指摘もある。加えて女側は田舎としては教養もあり、学校の教師という社会的地位もあり、クリスチャンというハイカラなところもあり、自我強く情熱的でもあるので、屈辱感に堪えられぬところもあつたかと思像される。真相不明のままの臆測であつてはいないかと思われるが、いずれにせよ初恋の清純な思い出に對し、これは暗く呪わしい悪夢であつたようである。

第三の女性は、昭和三年六月伊豆大島で会つた伊藤七雄の妹ちゑである。伊藤の家は水沢市で製粉業などで成功した素封家であり、一族の中からは多額納税者、学習院教授、デトロイト大学副学長などの名士が輩出し、伊藤自身もドイツに留学するが、胸を悪くし妹の付き添いで大島に転地療養していた。そしてその地に園芸学校を建てようと思いつき、その調査検分に賢治を招いた。実はそれを口実にして妹ちゑと賢治との見合いを考えていたようである。六月十三日大島に着き十五日ごろまで滞在したが、調査にばかり熱心で見合いの方は十分相互観察が行われなかつたらしい。この時の詩が「三原三部」という口語長詩で、その第一部は船中の往路風景、第二部は調査のスケッチ、第三部は帰路の海上風景をそれぞれ詠んでいる。第一部の末連の詩は異色で、注目すべきもの。

南の海の／南の海の／はげしい熱氣とけむりの中から／ひらかぬままにさえざえ香り／つひにひらかず水にこぼれる／巨きな花の蕾がある……

六月の夏の海の熱氣と霧煙の中に大輪の蕾のイメージがあり、それが花を開かぬままに終つてしまふという想定に、ちゑに對し見合い以前に結婚をあきらめていたことが想像される。ちゑの印象を森莊己池氏は、「小麦いろの肌をし、むっちりとおとふと、かおはかつきりと知的で、しかもそう明なというよりは、におうばかりに美しい一人の女性」と評しているが、それはこの詩の「巨きな花の蕾」のイメージに重なる。また、賢治は以前にも一度この女性に会っているのである。さてこの結婚を見合い前にあきらめていること

に疑問が残る。いくつか理由も想像されるが、私には次の二点が大きな理由として考えられる。第一はこの旅の二ヶ月後の八月、賢治は肺浸潤で倒れ、それ以後はほんの数箇月間東北砕石工場に勤務するが、大体起き上がれず死を迎える。この病気の二ヶ月前であるから健康に自信がなかったのではないかと。第二は高瀬つゆにとつた態度の誤解(9)から受けたとんだ手痛い失敗の直後であり、女性を恐れ敬遠する心があったであろうということである。なお、第三部の末連の詩句、

…あなたの上のそらはいちめん／そらはいちめん／かがやくかがやく／
猩々緋です

には、赤々と映える夕やけ雲とち多のイメージが重なり、永遠の幸福を祈る訣別の心情があるやに思われる。しかしこの詩の前の方に福島県の紳士たちが／熱海へ行くのがあらしで……

とあるので、この日は緋の夕映えなどではない悪天候であったと思われる。そこに現実をそのままの現実と見ることなく、心の色で、つまり心象スケッチとして受け止める賢治らしさが見られる。のちに友人に「おれは結婚するとすればあの女性だな」と話っていたそうである。その「すれば」がいつに仮定のままで終ったのである。賢治近親の人たちが賢治の独身について法華入信による仏障を大きな理由としているが、そうであるならこんなロマンスや女性関係は事前に避けられていたことであろう。私はそれも一つの理由に数えてもよいが、ほかの理由をより重視したい。それは、賢治が純粹永遠なロマンチストであったこと、(結婚はロマンに終止を打たねば

ならない)。第二の女性のような事件(9)によって女性恐怖が女性敬遠の心境になってしたこと、責任を伴う結婚に踏み入るには健康に自信がなかったこと、短く終わるのであるや人生の予賞からより価値あることに専念したい心情など、いくつかの複合条件が重なったことかと思われる。

宮沢賢治の人と作品について、年来取り組んできたが、まだまだ不明の点が多く、特に宗教や自然科学の面では私は全くの素人で、その方面を含めて多くの研究家の所説に負うところが大きく、拙稿をとじるに当たり深く謝意を表する次第、さらに忌憚のない御批正を期待して止まない。なお、本稿は國語教育の現場の人たちをも対象においたので、概説紹介的な論文となったことをも諒解されたい。(昭和五十七年十月)

注と参考事項

作品の本文の引用はすべて「校本宮沢賢治全集」(筑摩書房)による。

(1) 青江舜二郎著「宮沢賢治」(講談社) P 一五五

(2) 質・古着商を零細な農民・町民を搾取するものとして嫌い「私はこの郷里で財閥と言はれるもの、社会的被告のつながりに入ってあるので……」(昭和七・六儀府談一あて)と書く。しばしば転業を父に要望し対立する。

(3) 宮沢家は浄土真宗(他力本願)で賢治は日蓮宗(他力自力融合)

で両宗派上の対立はしばしばであった。

(4) 文語詩「公子」の異稿「桐の木に背き花咲き」の中で、「わが父はわが病ごと／＼二たびのいたつきを得ぬ」と。看病のつかられから病氣にかり共に入院することもあった。

(5) 賢治の短歌は明44〜大9にかけての十年間がその活動期で約八百二十首を詠む。「トシ筆写稿」（通例「歌稿A」という。賢治自筆稿を「歌稿B」とがある。

(6) 賢治同室の親友高橋秀松の手記に「目白の女子大から一週間に必ず一度の消息」とある。

(7) 大正四年十月二十一日トシ宛の手紙などをさす。トシが女子大に不足を感じて転校したいらしい相談に対するもの。

(8) 草野と賢治との交渉は大正十四年七月、草野の同人誌「銅羅」に加入を勧誘したころに始まり、何回か賢治は詩を発表する。

賢治の詩を「現在の日本詩壇の天才」（大15・8「精神」と激賞している。

(9) ジョバンニが親友カムバネルラの死を悲しみ「君のため、ほくのため）ほとたうの幸福をさがす」とマジェラン星雲に誓う場面などに濃い投影がある。

(10) 死後に発見された黒表紙の手帖で、一般には「雨ニモ負ケズ手帖」などよばれる。賢治晩年の心境を知る重要資料。

(11) 三次元（立体や空間）プラス時間の世界。時空の世界。ドイツの数学者ミンコスキーの唱えた世界。現実と夢、生と死、合理と非合理の融合した世界。賢治の言にも「四次元感覚とは静芸

術に流動を容れたもの」とある。科学と宗教の一体化した理想の世界。

(12) 宇宙を支配する根本的・根源的意志。「銀河を包む透明な意志、巨きな力と熱である」（農民芸術概論綱要）と。そしてそれは「あらゆる生物にほんたうの幸福をもたら」せてくれるものという。仏の意志にも通じる。そこに賢治は最後の信頼や安住をよせていた。

(13) このあたりは紀野一義氏の所説を参考にした。

(14) 森山一著「宮沢賢治の詩と宗教」（真世界社）

(15) 紀野一義著「法華経を読む」（講談社）による。

(16) 礼賛派の代表として谷川徹三、批判派の代表として中村稔などがある。谷川は童話の代表に「グスコープドリの伝記」を、詩の代表に「雨ニモ負ケズ」を、論稿の代表に「農民芸術概論綱要」をあげ、「グスコープドリの伝記」は「雨ニモ負ケズ」の具象化とみている。中村は敗北退却の詩であり、修辞が目立ち、スローガンのでおもしろくない。

(17) 小学校担任教師谷藤源吉の手に残っていた賢治の綴り方。「稀は黄金色に実り、その他の作物もみな実りて……」の短い作文（本文は校本全集巻十二下P8）

(18) 大正十五年一月から三月の間、農村青年三五名を稗貫農校に集めての講習会。賢治は講師を依頼されて農民芸術論を十一回にわたり講じた。その稿を充実させて同年六月まとめたものが「農民芸術概論綱要」である。

(19) 大正十五年三月、稗貫農校退職後、下根子桜の別宅に独居自炊し、開墾耕作をし、ここを事務所として羅須地人協会なる組織を作った。農業の講義をしたり音楽を楽しんだりした。警察から社会主義の疑いをかけられた。昭和三年まで。

(20) 口語詩「もうはたらくな」「春と修羅」(第三集)の中で「……青ざめてこはばった顔に／一人づつぶつかって／火のついたやうにはげまして行け／どんな手段を用ひても／弁償すると答へてあるけ」と激しく自己を責めている。

(21) 前者に「野の師父」「和風は河谷いっばいに」「もうはたらくな」など、後者に「響宴」「盗まれた白菜へ」などがある。

(22) 「ヒヂテリアン」とは動物質のたべ物を拒否し菜食にしようという者の結社、菜食主義者。

(23) 磯貝英夫氏に「一般に人々は賢治童話を論ずる場合、テーマ論に集中しやすいが、細部の不思議な生氣にふれることなしにはその魅力の核には迫れない」(国文学・昭五七年二月)の指摘があり、入沢康夫氏にも同様な指摘がある。

(24) Tertiary the younger tertiary the younger
Tertiary the younger mud-stone

あをじろひ破れ あをじろひ破れ
あをじろひ破れに おのれのかげ

……
なみはあをさめ 支流はそそぎ
たしかにここは 修羅のなごき

(注) Tertiary the younger—築川松屋の初期。mud-stone 泥砦。

賢治はこの詩に曲をつけ、農学校生徒を水泳につれて来て、歌わせたという。私は先年この浜で一老人に会い、その歌唱を聞いた。その老人は当時農校生徒で賢治に学んだ平来作氏である。

(25) 大正六年七月創刊の高農同人誌「アザリヤ」(創刊号)に発表。

(26) 著書に「宮沢賢治と三人の女性」がある。「彼は絶えず女性を求めてゐた」と。音楽の友藤原嘉藤治にも同じ言がある。

(27) 著書に「賢治随開」(角川書店)がある。ハバロック・エリス著「性学大系」を英書で読んでいたとか、性欲処理の方法として夜どおし外山牧場を歩きまわっていたなどの記事がある。

(28) 著書に「宮沢賢治—その愛と性」(芸術生活社)あり、拙稿は主にこれを参考にさせていた。

(29) 大正三年四月から翌年四月までの歌の中から特に恋に関係ありと思う数首を選んだ。なお歌稿A(B)は注5参照。数字は校本に付した歌番号。

(30) 賢治の文語詩は口語詩にかわって昭和四年ごろから詠まれる。多くは病中吟のもので、過去にとらえた題材や短歌でよんだ題材を再構想したものが多く。その発生原因について吉本隆明は①作品表現法の苦渋固化の打開、②病床にあつて心象スケッチ法ができず従来の形式の存続が不可能となった、③病床で思索的に老いたなどと。(吉本隆明全集第十五巻・頸草書房)

(31) 注28の磯府氏の著書に、賢治側から女に「やさしい心がいつは

いこもっていそいな舞ふわりとした、上品な趣味を思わせる優
雅な蒲団」を送った。これでは女側が結婚を許諾した贈り物
と誤解するのもむりがない。

ふんふん、おれは、おれは、おれは、
おれは、おれは、おれは、おれは、

And then the "modern"
And then the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"
And then the "modern" and the "modern"
And then the "modern" and the "modern"
And then the "modern" and the "modern"
And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"

And then the "modern" and the "modern"